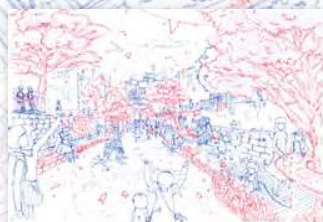


わがまちを経て、営む。

早稲田通りに主体性を取り戻し、
空間からまちを醸成する手法の構築。

Pj.3. 文教居住系界限：時代・世代をつなぐ

新旧住民、通う学生・生徒が、各々自らの居場所を見出し、
愛着の持てる、主体別・時間帯別の空間の使い方を提案する。
賑わいや積極的な交流ではなく、自分にあった空間体験を選
ぶことで、時代・世代を越えて帰りたいくなる愛着を醸成する。



<空間 × まちの提案の骨格>

I. 氏子 BID の提案

地形により棲み分けされた業務商業系・文教居住系の2つの
界限性を活かしながら、新旧の住民や空間開発がそれぞれ、
お互い自発的につながるまちの仕組みを醸成する。

古くからの地縁に配慮しつつ新たな人も主体となれる新しい
都心型コミュニティのあり方として、築土神社を中心とした
新規 BID 組織の立ち上げによるマネジメントを提案する。

II. 桜を中心とした植栽計画の提案

早稲田通りでは、分断されていた外堀・千鳥ヶ淵からの桜を核
とする緑の軸をつなぎ、歩きたくなる歩行者空間を創出する。
また、早稲田通りから靖国神社・東京大神宮・築土神社へ向
かう道を、このまちを横につなぐ軸として、緑の軸・歩行者
空間を引き込み、地元・観光客双方の回遊性向上を図る。

Pj.0. このまちらしさをつなぐ：11の要素をまちに展開する

このまちで営まれる文脈を読み解き、今ある毎日に小さく溶
け込んでいくような仕掛けを提案する。

小さな仕掛けはその一瞬だけでなく、緩やかに機能や役割が
変わり、新たなこのまちらしさとして後世へとつながる。



Pj.2. 2つの界限の間：まちの中の界限をつなぐ

業務商業系の賑わいと、靖国神社・東京大神宮からの回遊を
つなぎ、ちょっと先まで歩きたくなる設えを提案する。

観光客・地域住民の回遊性が向上し、早稲田通りの賑わいが
増した収益の一部が BID を通じてこのまちに還元される。

Pj.1. 業務商業系界限：新規開発とまちをつなぐ

オフィスや飲食が集まり、新しくこのまちに携わり始める人
が多い飯田橋駅前の界限において、新規開発とともに、新し
い人と古くから住む人とが自然と交わり、共にまちを運営し
ていくきっかけを生み出す空間を提案する。

■背景

近年のまちづくりの手法は、コミュニティや場、パブリックといっ
た、人・空間の関係性を重視するあまり、アウトプットが「賑わい」
で括れるような、誰の顔も見えない似通った空間に過ぎないこと
が多い。本提案では、**早稲田通り沿いの特徴的なアクティビティ**
と空間を個の視点から抜き出し、それぞれの主体が重なる総体と
して、まちのあり方を再編していく手法を模索する。

■分析と手法の模索

現状分析で抽出した、**早稲田
通りで営まれる、人それぞれの
時間帯別のアクティビティ**
に着目し、彼ら各々が主体と
なる空間を検討する。

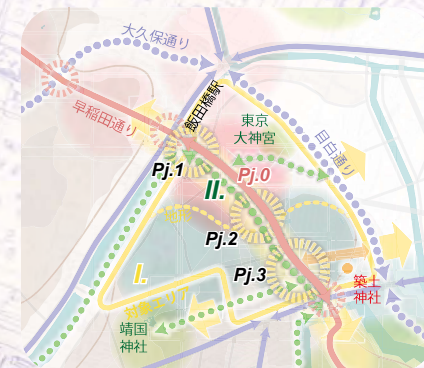
学生 生徒	親子	会社員	近隣 住民	近隣 住民	観光客
日常 平日（朝・ 昼・夕・夜）	異日常 休日（観光・体験）	非日常 祭・ イベント			

■提案コンセプト

<まちの提案の骨格>

本提案では、地形や大通りに囲まれ、同じ氏子範囲のエリアを、
一体的に考えるべき**ひとつのまち**として捉え、エリアの将来像を
描く。**早稲田通りは、このまちの中心を通る軸**となる。
これらを踏まえ、中心軸：早稲田通り沿道のマネジメントと、具
体的空間の改修・マネジメントの提案を行う。

Pj.0にて、早稲田通りの
空間・アクティビティの
現状を踏まえた、即地的
な「早稲田通りらしい」
空間提案を模索する。
それらを実現していく空
間提案として **Pj.1,2,3** を、
まちの仕組みの提案とし
て **I,II** を計画する。



本提案の核
= 詳細設計

将来的な接続点
= 誘導方針